

# 紀 要

第 14 号

2001. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

# 近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き

## －地域の検討6. 湖西南部地域－

小島孝修

### 1. はじめに

本稿は、瀬口眞司氏との共同研究「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き」の最後となる第6回であり、湖西南部地域について検討する。<sup>(1)</sup>我々が主に研究フィールドとしている滋賀県(近江)は、日本列島のほぼ中心に位置し、古くから東西日本の交差する地であった。この一連の研究は、この近江の地の、縄文時代および弥生時代前期の遺跡を地域ごとに集成して整理・検討し、今後のさらなる検討に向けての課題を抽出することに主要な目的を置いている。

筆者は考古学を歴史学として考えており、これらの検討をふまえて得られた成果を、具体的な手法についてはいまだ確立してはいないが、我々が現在生きている社会、さらには我々やその子孫たちが今後生きていくであろう社会に投影させていければと思っている。

### 2. 地理的条件(図1)

今回検討の対象とする湖西南部地域は、琵琶湖西岸地域のうちの南半分を指す。旧郡名でいう滋賀郡であり、現在の市町村名では滋賀郡志賀町と大津市の西部となる。本地域は、最大幅約13km・最大長約30kmと南北に細長い楔状を呈する。西は比叡山地に連なる山々を挟んで京都市と接し、北は比良山地の釈迦岳から北東に張り出した岳山を挟んで高島郡(湖西北部地域)と接し、東は琵琶湖南湖を挟んで湖南地域に面する。南については、瀬田川流出口の粟津湖底遺跡・石山貝塚などについてすでに「地域の検討3. 湖南地域」(瀬口1999)において検討対象としていることから、大津市街地までとした。<sup>(2)</sup>

本地域の地形について簡単に見ておきたい。<sup>(2)</sup>南部の比叡山地に連なって北部には比良山地が南南西から北北東にむけて走っており、この比良山地西側の地域は安曇川によって谷地形(葛川地区)が形成されている。安曇川は京都市左京区を水源としてこの谷

地形を通過して北上し、高島郡朽木村で流れを東に向け、同郡安曇川町・新旭町を經由して琵琶湖に注いでいる。一方の比叡山地・比良山地の東側の地域は、北部と南部とでは様相が異なる。これを本稿では「北半地域」「南半地域」と称して、以下に記述していく。

北半地域の主要な河川としては、北から比良川(流長約5km)・和邇川(同約11km)・真野川(同約11km)・天神川(同約10km)・雄琴川(同約6km)などがある。いずれも流長は比較的短くて流域面積は狭く、比叡山地あるいは比良山地の高位に水源を発してほぼ南東方向に流れる。上流においては谷底平野を形成し、中・下流においては段丘を発達させ、河口付近では氾濫平野や三角州を形成している。

南半地域の主要な河川としては、北から大正寺川(流長約3km)・大宮川(同約6km)・四ツ谷川(同約6km)・際川(同約3km)・柳川(同約4km)などがある。いずれも北半地域よりも流長・流域面積はさらに短くて狭く、比叡山地の高位に水源を発してほぼ南東方向に流れる。上流においては谷底平野をあまり形成することなく、中・下流で卓越した複合扇状地を発達させ、河口付近では小規模な氾濫平野や三角州を形成する。

北半地域・南半地域ともに山地部の稜線から湖岸までは4～8km程度の距離しかなく、湖岸には氾濫平野や三角州があまり発達していない。このことが、広大な沖積平野のみられる琵琶湖東岸の地形と大きく異なっており、以前から可耕地の狭さが指摘されていた。<sup>(3)</sup>

このほかに本地域を通過する重要な経路をみておきたい。まず東西には北半地域で和邇川沿いに西進する「途中越え」(国道477号)と、南半地域で柳が崎から西進する「山中越え」がある。また南側には、「逢坂の関」を通過する旧東海道(国道1号)が通っている。一方南北には、琵琶湖岸に沿って南西から北東に延びる西近江路があり、これは現在の国道



図1 湖西南部地域縄文早期～弥生前期遺跡分布図 (S = 1 / 100,000)

161号にほぼ重なる。また京都から途中峠を越えて葛川を通り、若狭小浜に抜ける道は、敦賀街道(鯖街道)と呼ばれる現在の国道367号である。これらの経路は昔からよく使われた街道であり、縄文時代や弥生時代前期においても重要な経路であったことが推測される。

### 3. 事象の整理

#### (1) 湖西南部地域の概要

『平成7年度 滋賀県遺跡地図』(滋賀県教育委員会1996)をもとに、それ以降の調査事例などを加えて集成したところ、管見にふれた限りでは、湖西南部地域において縄文時代および弥生時代前期の資料が検出された遺跡は26ヶ所を数える(図1～図3)。分布は対象地域の中央から南部、すなわち比叡山地の東側に集中する傾向をみせている。具体的には志賀町の南端から大津市街地にかけての地域であり、志賀町域に位置するのは1遺跡のみで、ほかはすべて大津市域に位置する。対象地域の北部である比良山地の東側・西側では、該期の遺跡はこれまでに見つかっていない。

表1は各遺跡の概要をまとめたものであり、各項目のうち「立地」については、『1:25,000土地条件図 大津』(国土地理院1984)および『1:25,000土地条件図 北小松』(国土地理院1984)を参考に、「山地・丘陵」・「段丘」・「扇状地」・「湖岸近接地」の4類型に区分した。このうちの「湖岸近接地」については、湖岸から2km以内の氾濫平野や三角州などを示している。これら26遺跡を主要河川の流域ごとに9の地区に分け、さらにそれらを立地により15の小地区に分けた。これらのうち1地区～4地区は北半地域に該当し、5地区～9地区は南半地域に該当する。

表2はこういった条件をふまえて各遺跡の消長をまとめたものである。時期のうち「縄文晩期後葉～弥生前期前半」については、縄文晩期後葉の遺物と弥生前期前半の遺物が共伴して出土する事例が近年多く確認されており、この二つの時期が時間軸的にはほぼ併行するものとして扱えることから設定した。

「特記事項」については、黒曜石など他地域から搬入された希少品や土器のほか、土偶や石棒といった

祭祀関係遺物など、その地域を考える上で重要と思われる事項を挙げた。

具体的な検討に入る前に、本稿における筆者の姿勢をいくつか明示しておきたい。第一に、各遺跡の内容あるいは質といった点についてである。表1からわかるように、遺構もなく数点の遺物が出土しただけの地点でも、遺跡として取り上げている。これらが人間の営みの痕跡としての「遺跡」としてはたしてとらえられるのか、と疑問に思われる読者も多いかもしれない。しかし、当該地域の該期における資料の少なさと、そのような「地点」が露营地などの性格をもつ可能性などを考慮すれば、含めて検討することはあながち無意味ではないと考える。ただし、こういった「遺物散布地」を数多くの遺構・遺物が検出された遺跡と同じ基準では扱えない。資料内容の吟味は、検討の中で当然必要となる。

第二に、26ヶ所という該期の遺跡数についてである。湖西南部地域の発掘調査件数は決して多いとは言えず、面積に対する調査頻度という点では他地域よりもむしろ少ない方であろう。この「26」という遺跡数も、面積的には他地域と比較すると決して多くはない。これが、この地域で生活していた人々が比較的少なかったことの反映なのか、あるいは調査頻度の少なさに起因するのか、現段階では判断できない。あくまでこの数値は、本稿を執筆している現時点で判明しているものであり、該期の人々が生活を営んだ全ての場所の数ではない。したがって以下の記述は、発掘調査により現時点で得られている事実を用いての分析であるという点を、重ねて了解されたい。

調査頻度の問題に関連して、26遺跡のうちの半数近くが、西大津バイパス(国道161号)やJR湖西線の建設に伴う調査で検出されていることは注意しておくべき点であろう。前者には屋敷割遺跡(3)、惣山・京ヶ山遺跡(4)、穴太遺跡(12)、大谷遺跡(13)、大谷南遺跡(14)、大伴遺跡(17)、橙木原遺跡(18)、北山田遺跡(19)、太鼓塚遺跡(20)、上高砂遺跡(21)の10遺跡があり、後者には、滋賀里遺跡(22)、北大津遺跡(25)の2遺跡がある。これは湖西南部地域に南北に細長いトレンチを2本入れたことと理解すると、比較的理解しやすいかと思う。すなわち、26遺跡のうちの約半数が当

	遺跡名	所在地	立地	概要	文献
1	中畑田	志賀町和途中	段丘	【1986】遺物包含層から縄文中期後葉(北白川C式)の土器1点が出土。	12
2	真野城跡	大津市真野6丁目	山地・丘陵	【1994・95】縄文早期中葉(高山寺式)の土器や水晶製局部磨製石鏃・装飾品を含む石器類が出土。	14
3	屋敷割	大津市家田町	山地・丘陵	【1980】縄文早期中葉の土器(高山寺式)が出土(詳細不明)。	未公表
4	惣山・京ヶ山	大津市家田町	山地・丘陵	【1980】縄文中期後葉の土器(北白川C式)が出土(詳細不明)。	未公表
5	真野神田	大津市真野4丁目、真野普門1丁目	段丘	【1974】遺物包含層から縄文後期前葉(中津式・北白川上層式Ⅲ期)の遺物が出土。	16,18
6	真野中村	大津市真野1丁目	段丘	縄文晩期の遺物が出土(詳細不明)。	13,18
7	衣川廃寺跡	大津市衣川1・2丁目	山地・丘陵	【1970】衣川廃寺の基壇から縄文早期中葉(黄島式)の遺物が出土。 【1995・1996】縄文早期中葉(黄島式)の土器が出土。	3,30
8	下仰木天神山	大津市衣川3丁目、仰木町7丁目	段丘	【1989】遺物包含層から縄文中期後葉(北白川C式)・後期前葉(中津式・福田KⅡ式)・後期中葉(北白川上層式Ⅲ期)の遺物が出土。	27
9	浮御堂	大津市本堅田1丁目	湖岸近接地	【1977】縄文中期前葉の鷹島式・北陸系土器が出土(詳細不明)。	未公表
10	雄琴段々・雄琴出口	大津市雄琴3丁目	山地・丘陵	【1993】段々遺跡で遺物包含層から縄文早期中葉(高山寺式)・早期後葉～前期前葉の遺物が出土。【1995】出口遺跡で、遺物包含層から縄文中期後葉(北白川C式)の遺物が出土。	31
11	苗鹿	大津市苗鹿1丁目	扇状地	【1994～96】縄文中期後葉(北白川C式)・後期前葉(中津Ⅰ式・四ツ池式)の遺物が出土。	14
12	穴太	大津市穴太町1・2丁目、唐崎2丁目、弥生町	扇状地	【1973】縄文中期後葉(北白川C式)の土器が出土。【1986】縄文晩期後葉の土器が出土。【1981～1991】竪穴住居6棟(縄文後期中葉・後葉)・土器棺墓(縄文晩期中葉・後葉)・集石遺構(縄文後期中葉・後葉、晩期後葉)、縄文後期中葉・後葉の配石遺構・貯蔵穴・祭祀遺物埋納土坑などを検出。包含層などからも縄文中期前葉～後葉・後期前葉～後葉・晩期前葉～後葉の土器のほか土偶・岩版・耳栓・石棒などが出土。	9,10,15,23
13	大谷	大津市滋賀里町2・3丁目	扇状地	【1988～91】有舌尖頭器や石匙など、縄文の石器が出土。	29
14	大谷南	大津市滋賀里町2・3丁目	扇状地	【1989～91】有舌尖頭器が出土。	28
15	小山	大津市滋賀里町2丁目	扇状地	【1979】縄文早期中葉(黄島式)の土器が出土。	19
16	唐崎神社境内	大津市唐崎1丁目	湖岸近接地	縄文後期・晩期の遺物が出土(詳細不明)	13
17	大伴	大津市南滋賀2丁目	山地・丘陵	【1980・81】石鏃・石匙などの石器が出土。文献13には「後晩期」とある(詳細不明)。	5,13
18	橙木原	大津市南志賀町1丁目	段丘	【1981】遺物包含層などから縄文後期前葉の遺物が出土。	4
19	北山田	大津市滋賀里町1・2丁目	扇状地	【1988】遺物包含層から縄文早期後葉・中期前中葉(船元式土器体部)・中期後葉(北白川C式)、後期中葉(北白川上層式Ⅲ期)の遺物が出土。	26
20	太鼓塚	大津市滋賀里1丁目、高砂町	扇状地	【1986～91】古墳の盛土などから、縄文早期後葉(鶺鴒ヶ島台式・塩屋式)～前期前葉・後期中葉(北白川上層式Ⅲ期・元住吉山Ⅰ式)・晩期後葉(凸帯文土器)の遺物が出土。	24
21	上高砂	大津市高砂町	扇状地	【1987】石鏃2点が出土。	25
22	滋賀里	大津市滋賀里1・2・4丁目、見世1・2丁目、蓮池町、際川2・3丁目	扇状地	【1953】京都大学による調査。縄文晩期前半の遺物が出土、中空土偶・玉類・石刀がある。【1971・72】縄文晩期の土壇墓38基・土器棺墓26基や貝塚を検出、これらから縄文後期・晩期の遺物が出土。包含層から縄文早期中葉(高山寺式)・中期後葉(北白川C式)・後期(中津式～宮滝式)・晩期前葉(滋賀里Ⅰ式)・晩期後葉(滋賀里Ⅳ式～長原式)、弥生時代前期(前半・後半)の遺物が出土。石器には石棒類などもある。【1986】土壇墓6基を検出、このうち1基には屈葬人骨が残存し、ほかの1基には蛇紋岩製勾玉を副葬。また縄文晩期前葉(滋賀里Ⅱ式)の溝2条を検出。そのほか包含層から出土した石器類に黒曜石製石鏃1点がある。【1990・91】縄文晩期後葉の土壇墓17基・土器棺墓6基を検出、その下層で縄文中期の石囲炉や後期の土坑を検出、そのほか縄文中期後葉(北白川C式)・後期前葉(北白川上層式1・2期)・後期中葉(北白川上層式3期)・後期後葉(元住吉山Ⅱ式・宮滝式)・晩期前葉(滋賀里Ⅰ式)の遺物が出土。石器にはヒスイ製勾玉や石棒もある。	1,2,11,21,27,32,33
23	南滋賀	大津市南志賀町1・2・3丁目、勸学1丁目	扇状地	【1958】弥生前期末から中期にかけての方形周溝墓と土壇墓群からなる集団墓地を検出。【1989】縄文中期後葉の遺物が出土。【1990】弥生前期中段階の竪穴住居1棟や同前期新段階の溝2条を検出、そのほかサヌカイト製石鏃2点が出土。	6,8,22
24	錦織	大津市皇子が丘1丁目、錦織1・2丁目、桜野町1丁目	扇状地	【1971・72】縄文晩期後葉・弥生前期前半(中段階)の遺物が出土。 【1975】第3地点でサヌカイト製石匙2点が出土。【1976】遺物包含層・ピットから縄文早期中葉(黄島式)・早期後葉(鶺鴒ヶ島台式)の土器が出土。【1980】遺物包含層から独鈷石が出土。【1981】縄文後期中葉(北白川上層式Ⅲ期・元住吉山Ⅰ式)・後期後葉(宮滝式)の土器が出土。【1983】遺物包含層から縄文後期前葉(福田KⅡ式)の遺物が出土。 【1986】遺物包含層から縄文早期中葉(高山寺式)の土器が出土。 【1999】遺物包含層から縄文早期後葉(入海Ⅱ式)・縄文中期後葉(北白川C式)の土器が出土。	7,17,20,22
25	北大津	大津市皇子が丘1・2丁目、桜野町1丁目	扇状地	【1971】縄文中期前葉・中葉(船元Ⅰ・Ⅱ式)の包含層を検出、そのほか縄文早期中葉(押型文土器)・縄文後期前葉・縄文晩期後葉～弥生前期前半の遺物も出土。	2,13
26	大津城	大津市浜大津1～4丁目、長等2・3丁目、中央1丁目	湖岸近接地	【1995】断割から縄文中期後葉(北白川C式)・後期初頭(中津Ⅱ式)の土器が出土。	未公表

表1 湖西南部地域の概要

番号	遺跡名	群	有舌 尖頭器	早期			前期			中期			後期			晩期 前 後	縄文晩後・ 弥生前期前	弥生前 期後半	特記事項	
				前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後					
1	中畑田	1									○									
2	真野城跡	2 A			○													ヒスイ装飾品		
3	屋敷割	2 A			○															
4	惣山・京ヶ山	2 A									○									
5	真野神田	2 B										○								
6	真野中村	2 B													←→					
7	衣川廃寺跡	3 A			○															
8	下仰木天神山	3 B									○	○	○							
9	浮御堂	3 C								○										
10	雄琴段々・雄 琴出口	4			○	○	○				○									
11	苗鹿	5									○	○								
12	穴太	6 A									○	○	○				●	○	関東系後期土器（堀之内Ⅰ・Ⅱ式、加曾利B2式）・土偶・岩版・耳栓・石棒類・陰陽物形木製品（後・晩期）	
13	大谷	6 A	○																	
14	大谷南	6 A	○																	
15	小山	6 A			○															
16	唐崎神社境内	6 B																		
17	大伴	7 A																		
18	橙木原	7 B											○							
19	北山田	7 C			○					○	○	○								
20	太鼓塚	7 C			○	○							○	○			○			
21	上高砂	7 C																		
22	滋賀里	7 C	○		○						○	○	○	○	○	○	○	●	○	関東系後期土器（堀之内Ⅱ式、加曾利B式）・北陸系晩期土器（八日市新保式・御経塚式）東北系晩期土器（大洞式）・遮光器土偶・黒曜石石鏃・石棒類・ヒスイ勾玉・蛇紋岩勾玉・骨角髪飾り・土製腕輪（晩期）
23	南滋賀	7 C									○							●	○	
24	錦織	8			○	○					○	○	○	○	○			●	○	
25	北大津	8			○						○	○						●		
26	大津城	9									○	○								

凡例：「縄文晩後・弥生前期前」の●は縄文晩後葉と弥生前期前半の遺物両方が出土していることを示す。  
矢印は時期が確定できないことを示す。

表2 湖西南部地域の消長



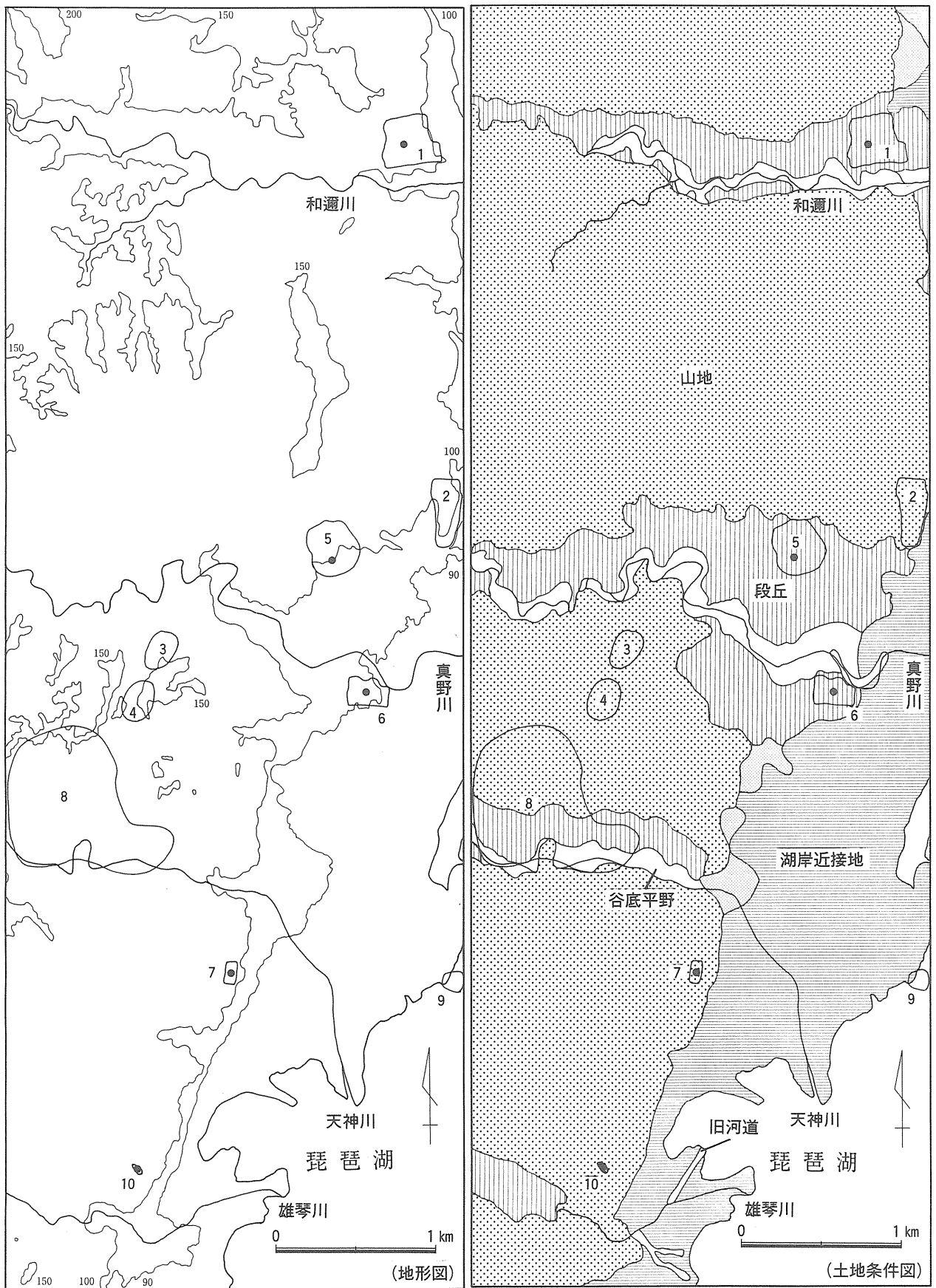


図2 湖西南部地域北半部 縄文遺跡分布図 (S = 1 / 35,000)

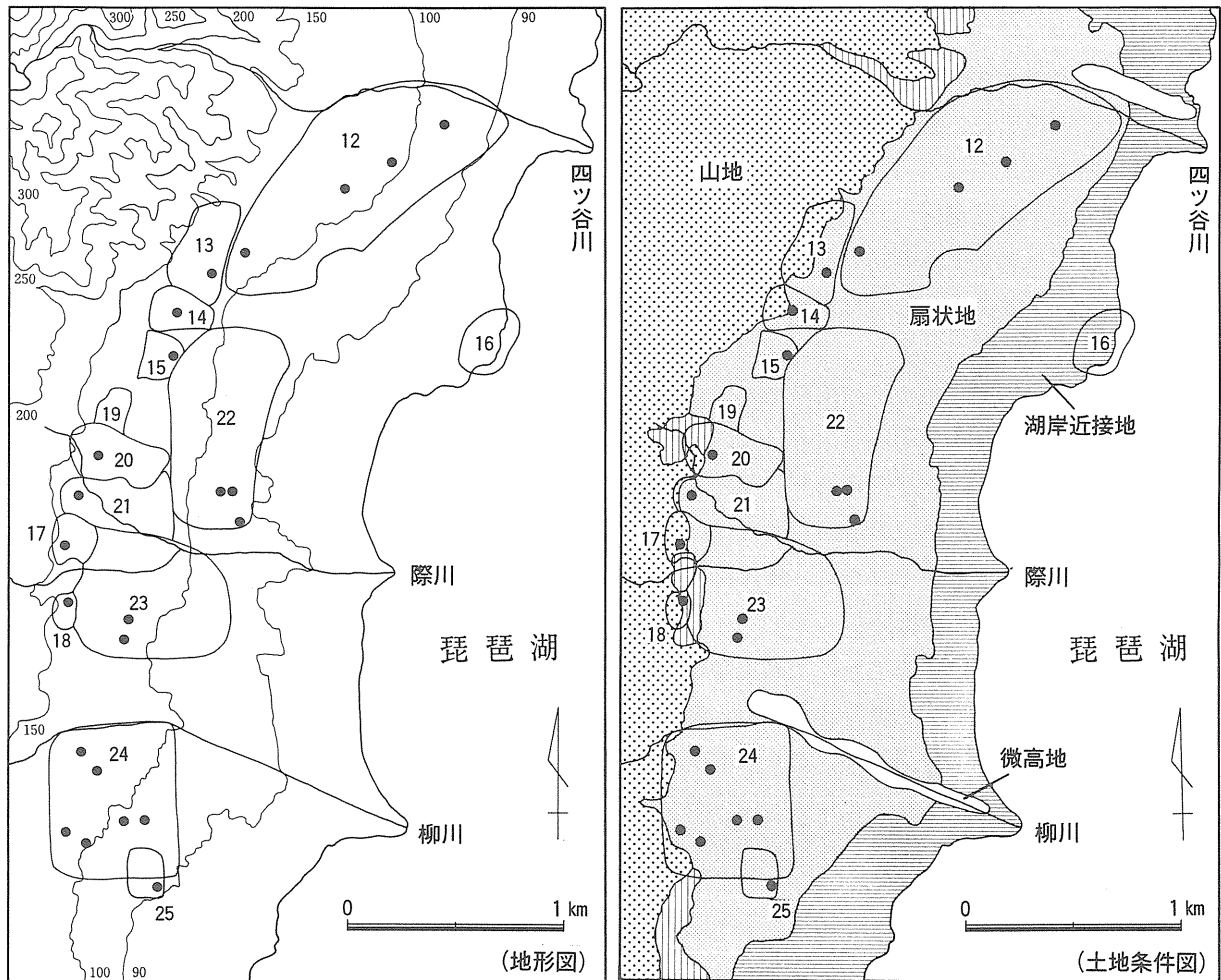


図3 湖西南部地域南半部 縄文遺跡分布図 (S = 1 / 35,000)

該地域を南北に貫く2本の曲線上に位置しており、現段階で示される分布域が多分にそのような調査頻度によるものであることを留意しておく必要がある。

(2) 各地区の内容とその消長

以下、各地区の具体的な検討を行う。

- 1 地区：和邇川中流域地区 (1) 和邇川中流域の段丘に立地する中畑田遺跡(1)がある。縄文時代中期後葉の土器があるが、明確な遺構に伴うものではなく、搬入品・祭祀遺物なども確認されていない。
- 2 A 地区：真野川中・下流域地区① (2～4) 真野川中・下流域の山地・丘陵に立地する3遺跡があり、2 B地区と分布域は重複する。真野城跡(2)・屋敷割遺跡(3)に縄文時代早期中葉の資料があり、このうち真野城跡には水晶製異形局部磨製石鏃やヒスイ装飾品がある。それ以降では、惣山・京ヶ山遺跡(4)で縄文中期後葉の土器がある。これらはいずれも明確な遺構に伴うものではなく、真野城跡以外では搬入品・祭祀遺物なども確認され

ていない。

- 2 B 地区：真野川中・下流域地区② (5・6) 真野川中・下流域の段丘に立地する2遺跡があり、2 A地区と分布域は重複する。真野神田遺跡(5)では土坑を検出、縄文後期前葉の資料が出土している。このほか真野中村遺跡(6)に縄文後・晩期の資料があるというが、詳細は不明である。搬入品・祭祀遺物なども確認されていない。
- 3 A 地区：天神川中流域地区 (7) 天神川中流域の山地・丘陵に立地する衣川廃寺跡(7)がある。縄文時代早期中葉の資料があるが、明確な遺構に伴わず、搬入品・祭祀遺物なども確認されていない。
- 3 B 地区：天神川上流域地区 (8) 天神川上流域の段丘に立地する下仰木天神山遺跡(8)がある。縄文中期後葉・後期前葉・後期中葉の資料があるが、明確な遺構に伴うものではなく、搬入品・祭祀遺物なども確認されていない。
- 3 C 地区：天神川下流域地区 (9) 天神川下流域の湖岸近接地に立地する浮御堂遺跡(9)がある。縄



文中期前葉の北陸系の土器があるが、明確な遺構に伴うものではなく、搬入品・祭祀遺物なども確認されていない。

4 地区：雄琴川下流域地区 (10) 雄琴川下流域の山地・丘陵に立地する雄琴段々遺跡・雄琴出口遺跡(10)がある。両者は近接して立地するため、一つの遺跡として今回は取り扱う。縄文早期中葉の資料や、明確な土器型式の特定は困難であるがおおむね縄文早期後葉から前期前葉にかけての所産と思われる資料が雄琴段々遺跡にあり、縄文中期後葉の資料が雄琴出口遺跡にある。これらはいずれも明確な遺構に伴うものではなく、搬入品・祭祀遺物なども確認されていない。

5 地区：大正寺川下流域地区 (11) 大正寺川下流域の扇状地に立地する苗鹿遺跡(11)がある。縄文中期後葉・後期前葉の資料があり、とくに前者の石器が多く出土している。しかしこれらは明確な遺構に伴うものではなく、搬入品・祭祀遺物なども確認されていない。

6 A 地区：四ッ谷川中流域地区 (12~15) 四ッ谷川中流域の扇状地に立地する 4 遺跡があり、有舌尖頭器が大谷遺跡(12)・大谷南遺跡(13)に、縄文早期中葉の資料が小山古墳群(14)にある。それ以後は穴太遺跡(15)で縄文中期前葉から弥生前期後半までの資料がみられ、とくに縄文後期・晩期の遺構・遺物の内容が質・量ともに豊富である。遺構では、縄文後期中葉・後葉の竪穴住居や集石遺構・貯蔵穴、縄文晩期前葉から後葉にかけての土壙墓や土器棺墓などがあり、このほかに陽物・陰物形木製品を埋納した土坑がある。遺物では、搬入品として縄文後期の関東系土器、祭祀品としては土偶や岩偶・石棒類、装飾品として耳栓がある。

6 B 地区：四ッ谷川下流域地区 (16) 四ッ谷川下流域の湖岸近接地に立地する、唐崎神社境内遺跡(16)がある。縄文後・晩期の土器が出土しているとされているが、詳細については不明である。

7 A 地区：際川上流域地区① (17) 際川上流域の山地・丘陵の扇状地に近接する地点に立地する大伴遺跡(17)がある。縄文後期前葉の資料があるが明確な遺構に伴うものではなく、搬入品・祭祀遺物なども確認されていない。

7 B 地区：際川上流域地区② (18) 際川上流域の段丘の扇状地に近接する地点に立地する橙木原遺跡(18)がある。縄文後期前葉の資料があるが、明確な遺構に伴うものではなく、搬入品・祭祀遺物なども確認されていない。

7 C 地区：際川中流域地区 (19~23) 際川中流域の扇状地に立地する 5 遺跡がある。有舌尖頭器と縄文早期中葉の資料が滋賀里遺跡(22)で、縄文早期後葉の資料が北山田遺跡(19)・太鼓塚遺跡(20)で、縄文中期前葉の資料が北山田遺跡で、それぞれみられる。縄文中期後葉以降の資料は各遺跡で確認されるが、なかでも滋賀里遺跡はその後の資料が継続して確認され、質・量ともに内容は豊富である。遺構では、縄文晩期前葉から後葉にかけての 100 基以上の土壙墓・土器棺墓や貝塚がある。遺物では、搬入品としてはまず土器があり、縄文後期前葉の関東系、縄文晩期後葉の北陸系・東北系のものがある。縄文晩期後葉の東北系の搬入品としてはこのほかに東北系の遮光器土偶があり、また産地比定はされていないが黒曜石製の石鏃がある。祭祀品としては縄文後・晩期の土偶や岩偶・石棒類があり、このほかに装飾品として耳栓や勾玉（ヒスイ製・蛇紋岩製）、骨角器製装飾品がある。弥生前期の資料では、南滋賀遺跡(23)で中段階の竪穴住居 1 棟や、前期末から中期にかけての方形周溝墓がある。

8 地区：柳川中流域地区 (24・25) 柳川中流域の扇状地に立地する 2 遺跡がある。錦織遺跡(24)には、縄文早期中葉・後葉、縄文後期前葉～後葉、縄文晩期後葉～弥生前期後半の資料があるが、いずれも明確な遺構に伴うものではない。祭祀遺物としては独鈷石とされる遺物がある。明確な時期比定はなされていないが、縄文晩期～弥生前期のものであろう。北大津遺跡(25)には、縄文早期中葉・中期前葉・中期中葉・晩期後葉の資料があるが、遺構などについての詳細は不明である。

9 地区：大津市街地地区 (26) とくに目立った河川が付近にはないが、大津市街地の湖岸沿いに立地する、大津城遺跡(26)がある。縄文中期後葉と縄文後期前葉の土器が出土しているが、明確な遺構に伴うものではなく、搬入品・祭祀遺物なども確

認されていない。

### (3) 段階の設定

以上、湖西南部地域における各地区の内容と消長について整理した。本節ではこれらの成果をもとに、当地域における事象について整理する。

湖西南部地域における旧石器時代の資料については、真野町付近(2地区周辺)で尖頭器の採集資料があり、また南滋賀遺跡(7C地区)の1978年度の調査でも、尖頭器が出土している。有舌尖頭器も6A地区・7C地区の3遺跡にあるが、これらはいずれも扇状地に立地する。これらの資料により、旧石器時代や縄文時代の比較的早い段階では、南半地域の扇状地をおもな活動領域としていた可能性が想定される。以下に段階を設定し、事象面の整理を行いたい。なお、詳細な時期が不明な資料については、ここでは取り上げておらず、また縄文後期中葉に関しては、段階設定をより明確に示すため、前半(北白川上層式Ⅲ期)と後半(一乗寺K式・元住吉山I式)に分割した。

第1段階(縄文早期中葉～縄文前期前葉) 2A地区・3A地区・4地区・6A地区・7C地区・8地区の各地区で活動痕跡が確認される。これらは立地では北半地域は山地・丘陵に、南半地域は扇状地に限られる。明確な遺構が検出された事例はないが、希少品・祭祀品では2A地区に装飾品がある。

第2段階(縄文中期前葉～縄文中期中葉) 縄文前期中葉から後葉にかけての断絶期を挟んで、ふたたび活動痕跡が確認されるようになるが、その数は減少する。新たに北半地域の3C地区で資料がみられるが、これは立地で言えば湖岸近接地への進出といえる。その他の遺跡の立地はすべて南半地域の扇状地である。依然として明確な遺構が検出された事例はなく、また希少品・祭祀品の出土例もない。

第3段階(縄文中期後葉～後期中葉前半) 新たに1地区・2B地区・3B地区・5地区・7地区・9地区で活動痕跡が確認される。活動痕跡数は大幅に増加し、時期比定の可能な資料が出土している地区はこの段階でほとんどが出揃う。立地では新たに段丘への進出が認められ、また一時途切れ

ていた山地・丘陵への立地も再び確認されるなど、分類した4立地全てで活動痕跡が確認される。さらに遺構や希少品のあり方にも若干の変化が認められる。遺構には、2B地区で検出された縄文後期前葉の土坑がある。祭祀品としては搬入品としては、6A地区・7C地区に縄文後期前葉の関東系の土器がある。

第4段階(縄文後期中葉後半～後期中葉) 明確な資料が確認されるのは南半地域の扇状地のみであり(6A地区・7C地区・8地区)、北半地域やその他の立地では確認されていない。前段階よりも活動痕跡数が減少するが、遺構や希少品・祭祀品は飛躍的に増加する。とくに6A地区・7C地区でのあり方が顕著であり、以下に述べる遺構・遺物については、このどちらかあるいは両方の地区で検出されたものである。遺構は、縄文後期中葉後半から後葉にかけての居住施設や貯蔵穴、縄文晩期前葉から中葉にかけての貝塚や墓域(土壙墓・土器棺墓)がある。遺物は、祭祀品としては縄文後期中葉の土偶・石棒をはじめ、岩版や陽物・陰物形木製品に加え、装飾品の類があり、搬入品としては縄文後期中葉後半の関東系の土器や縄文晩期前葉の黒曜石製の石鏃がある。

第5段階(縄文晩期後葉～弥生前期後半) 引き続き明確な資料が確認されるのは南半地域の扇状地のみであり(6A地区・7C地区・8地区)、北半地域やその他の立地では確認されていない。活動痕跡数は前段階よりも増加する。遺構は、縄文晩期後葉の墓域(土器棺墓・土壙墓)や、弥生前期の住居施設や墓域(方形周溝墓)などがある。遺物では、祭祀品として6A地区・7C地区に縄文晩期後葉の土偶・石棒が、7C地区にヒスイや蛇紋岩を素材とする勾玉が、8地区に独鈷石がある。また搬入品として、7C地区に縄文晩期後葉の北陸・東北系の土器や東北系の土偶がある。

## 4. 結び

これまでの検討により得られた成果の中で、最も顕著な事象としてみられるのは、湖西南部地域においては、縄文時代および弥生時代前期の遺跡は、全時期・全段階を通じてその立地の半分以上が扇状地

		山地・丘陵	%	段丘	%	扇状地	%	湖岸近接地	%	合計(数)	%
	縄文早期前葉										
第1段階	縄文早期中葉	■■■■■	50	0	0	■■■■■	50	0	0	8	100
	縄文早期後葉	■■■	25	0	0	■■■■■■■	75	0	0	4	100
	縄文前期前葉	■■■■■	50	0	0	■■■■■	50	0	0	2	100
第2段階	縄文前期中葉		0	0	0		0	0	0		
	縄文前期後葉		0	0	0		0	0	0		
	縄文中期前葉		0	0	0	■■■■■■■■■	75	■■■	25	4	100
第3段階	縄文中期中葉		0	0	0	■■■■■■■■■■■	100		0	2	100
	縄文中期後葉	■■■	18	■■■	18	■■■■■■■	55	■	9	11	100
	縄文後期前葉		0	■■■	30	■■■■■■■	60	■	10	10	100
第4段階	縄文後期中葉		0	■■■	20	■■■■■■■■■■■	80		0	5	100
	縄文後期後葉		0	0	0	■■■■■■■■■■■	100		0	3	100
	縄文晩期前葉		0	0	0	■■■■■■■■■■■	100		0	2	100
第5段階	縄文晩期中葉		0	0	0	■■■■■■■■■■■	100		0	2	100
	縄文晩期後葉～ 弥生前期後半		0	0	0	■■■■■■■■■■■	100		0	4	100
	平均		8.9		4.3		65.3		2.8		100

■=10%(四捨五入)

表3 湖西南部地域の時期ごとの遺跡立地の推移

		山地・丘陵	%	段丘	%	扇状地	%	湖岸近接地	%	合計(数)	%
第1段階	縄文早中～前前	■■■■■	40	0	0	■■■■■■■	60	0	0	10	100
第2段階	縄文中前・中中		0	0	0	■■■■■■■■■	75	■■■	25	4	100
第3段階	縄文中後～後中前	■	13	■■■	27	■■■■■■■	55	■	7	15	100
第4段階	縄文後中後～晩中		0	0	0	■■■■■■■■■■■	100		0	4	100
第5段階	縄文晩後～		0	0	0	■■■■■■■■■■■	100		0	6	100
	平均		11		5.4		78		6.4		100

■=10%(四捨五入)

表4 湖西南部地域の段階ごとの遺跡立地の推移

に集中しているという点である。最後にこの点について整理し、今後の検討への備えとしておきたい。

表3・表4は本誌掲載の瀬口論文における表現方法(本誌21頁参照)を用いたものである。表3は各時期の、表4は各段階の、それぞれ立地の推移を割合で示したものである。これらの表により、湖西南部地域を全体としてみれば、全時期・全段階を通じて扇状地に過半数の遺跡が立地し、そのほかに第1段階以降は山地・丘陵へ、第2段階以降は湖岸近接地へ、第3段階は段丘へと、それぞれある程度の割合で立地がみられるという考え方ができる。

この「湖西南部地域における遺跡立地の扇状地への集中傾向」は、前述の瀬口論文における琵琶湖東岸のありかたと比較すると、より一層その特徴が認識される。瀬口氏のように表4において「段丘」を扇状地に含めて考えれば、当地域における扇状地への集中傾向はより一層明確となる。また7A区の大伴遺跡<sup>(17)</sup>と7B区の橙木原遺跡<sup>(18)</sup>については、それぞれ扇状地に近接する山地・丘陵と段丘に立地していることから、これらも広い意味で扇状地に含めて

考えればこの傾向は一層強まる。なお、これが琵琶湖東岸と琵琶湖西岸という2つの対極的なものとしてとらえられるのかどうかといった点については、湖西北部地域について同様の検討を改めて行ったのちに考えてみたい。

ただ、湖西南部地域としてみればそのような傾向が導き出されたとしても、前述のように北半地域と南半地域では地勢が異なり、該期の遺跡が立地する地形も異なっていることは考慮しなければならない。すなわち、北半地域では、第1段階は山地・丘陵のみに、第2段階は湖岸近接地のみに、第3段階は山地・丘陵と段丘のみに、それぞれ活動痕跡が確認され、第4段階以降は活動痕跡が確認されていない。一方の南半地域では、全段階を通じて扇状地にはほぼ集中し、段丘や山地・丘陵、湖岸近接地での活動痕跡は第3段階に限って少数がみられる程度である。

こうした立地変化の傾向、すなわち適応地の拡大については、経済活動＝食料獲得と大きな関係があるのではないかと考えている。北半地域では、第1段階・第3段階においては山地・丘陵や段丘といっ

た比較的内地に適應し、第2段階においては湖岸近接地に適應している。これは各段階で、食料獲得に要する労働力を、山と湖のどちらかに集中的に投下していた可能性を想定させる。一方南半地域では、全段階を通じて、山地・丘陵と湖岸との中間地点である扇状地に立地している。これは、食料獲得に要する労働力を、山と湖の両方に投下していた可能性を想定させるのである。なお、南半地域の第3段階で適應地が拡大した現象は、人口増加などによる食糧増産の必要性を背景とするものかもしれない。

この南半地域にみられる「遺跡立地の扇状地への集中傾向」は、琵琶湖湖岸と比叡山地との距離が比較的短いという、特徴的な地勢によるものと考えられる。このような地勢においては、山地・丘陵と湖岸近接地のどちらかに偏って居住し、食料の生産性を高める必要は必ずしもないのではなからうか。すなわち、その中間の扇状地に居住すれば、湖岸と山地の両方が活動領域となり、扇状地そのものの生産性はたとえ低くても、山の幸と湖の幸の両方を獲得することが可能となる。

南半地域の6A地区・7C地区・8地区における第4段階・第5段階は、前述のように質・量ともに豊富な内容を持った遺構・遺物が検出されている。あたかもそれは、前段階まで湖西南部地域に分散していたが、この段階になって集中して居住するようになったかのようなのである。高い生産性を背景に、穴太遺跡・滋賀里遺跡といった大規模な集落が営まれることとなったのであろう。扇状地という水はけの良い土地柄ならば、とくにそこに農耕を結びつけて生産性を考えることもない。

南半地域の扇状地への集中傾向の要因としては、経路の結節点という点もあげられようか。扇状地の先端部付近には湧水点があるため、主要な経路となりやすい。したがって南半地域の扇状地上には、南北の基幹経路が通過していた可能性が考えられる。この経路を南下すれば、栗津湖底遺跡や石山貝塚のある瀬田川流出口に達することができる。また比叡山地を挟んで西側には縄文早期以降継続する集落である修学院・一乗寺・北白川の諸遺跡群があり、そこに至るには東西にのびる山中越の経路がある。これら東西と南北二つの経路の結節点として、湖西南

部南半地域には人々・物資が集中したのではなからうか。

ただこれらの検討が、あくまで現時点で判明している資料を用いてのものであることは、繰り返しになるが認識せねばならない。

#### 謝辞

本稿の執筆に当たっては、同僚の松澤修氏・中村健二氏・瀬口眞司氏・鈴木康二氏・藤崎高志氏、並びに大津市教育委員会・大津市埋蔵文化財センターの吉水眞彦氏・栗本政志氏・田中久雄氏をはじめとする多くの方々に、資料の実見に際して様々な便宜を図っていただき、また多くの貴重な助言をいただきました。文末ながら、感謝いたします。

(こじま たかのぶ：調査普及課技師)

#### 註

- (1) これまでの「地域の検討1～5」については、『紀要』誌上において、掲載している。
  - ・瀬口眞司「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き 一地域の検討1. 湖東北部地域-」『紀要』第11号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1998
  - ・小島孝修「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き 一地域の検討2. 湖東南部地域-」『紀要』第11号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1998
  - ・瀬口眞司「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き 一地域の検討3. 湖南地域-」『紀要』第12号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1998
  - ・小島孝修「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き 一地域の検討4. 湖西北部地域-」『紀要』第12号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1998
  - ・瀬口眞司「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き 一地域の検討5. 湖北地域-」『紀要』第13号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1998
- (2) 地理的条件については、以下の文献に拠った。
  - ・滋賀県百科事典刊行会編1984『滋賀県百科事典』大和書房
  - ・平凡社地方資料センター1991『日本歴史地名体系第25巻 滋賀県の地名』
  - ・角川書店1983『角川日本地名大辞典24 滋賀県』
- (3) 松澤 修・細川修平ほか1991『錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要V-付. 近江国庁周辺遺跡調査概要-』滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会
- (4) 早期以降の時期区分に関しては、土偶シンポジウム奈良大会(1997.11)で用いられた以下の時期区分を用いた。

- 早期 前葉：ネガティブ押型文 中葉：通常の押型文 後葉：条痕文  
 前期 前葉：羽島下層Ⅰ式 中葉：羽島下層Ⅱ式～北白川下層Ⅱa式 後葉：北白川下層Ⅱb式～大歳山式  
 中期 前葉：鷹島式・船元Ⅰ式 中葉：船元Ⅱ・Ⅲ式 後葉：船元Ⅳ式～北白川C  
 後期 前葉：中津式～北白川上層式Ⅱ期 中葉：北白川上層式Ⅲ期～元住吉山Ⅰ式 後葉：元住吉山Ⅱ式・宮滝式  
 晩期 前葉：滋賀里Ⅰ・Ⅱ式 中葉：滋賀里Ⅲa式・篠原式 後葉：突帯文
- (5) 勢田廣行1977「大津市真野小学校保管の木葉形尖頭器」『滋賀文化財だより』No. 4
- (6) 林 博通ほか1993『南滋賀遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- (7) 瀬口氏は「水はけの良い」ということで、「段丘・台地」も「扇状地」に含めているため、本稿における地形区分とは多少異なる。筆者は段丘への立地が縄文中期後葉から縄文後期中葉という限られた時期のみであり、それを強調することもあって、「段丘」という立地区分を設けている。

## 引用文献

文献番号は、表1の「文献」欄の番号に対応する。なお、発行者については以下のように略した。

滋賀県教育委員会→県教委 財団法人滋賀県文化財保護協会→(財)協会 大津市教育委員会→市教委

- 1 丸山竜平ほか1968『国鉄湖西線関係遺跡部婦調査報告書』県教委
- 2 田辺昭三ほか1973『湖西線関係遺跡発掘調査報告書』県教委
- 3 丸山竜平ほか1975『衣川廃寺』県教委・(財)協会
- 4 林 博通ほか1976『橙木原遺跡発掘調査報告Ⅱ』県教委・(財)協会
- 5 林 博通ほか1983『大伴遺跡発掘調査報告』県教委・(財)協会
- 6 松澤 修・細川修平ほか1991『錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要Ⅴ一付.近江国庁周辺遺跡調査概要一』県教委・(財)協会
- 7 林 博通ほか1992『錦織遺跡一近江大津宮関連遺跡一』県教委・(財)協会
- 8 林 博通ほか1993『南滋賀遺跡』県教委・(財)協会
- 9 仲川 靖ほか1994『一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う 穴太遺跡発掘調査報告書Ⅰ』県教委・(財)協会
- 10 仲川 靖ほか1997『一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う 穴太遺跡発掘調査報告書Ⅱ』県教委・(財)協会
- 11 滋賀県埋蔵文化財センター1991「人骨の残る縄文時代晩期の土壙墓群」『滋賀埋文ニュース』第139号
- 12 丸山竜平・小熊秀明1996「第2章 原始・古代の生活と文化 1. 比良山地の黎明」『志賀町史』第1巻 志賀町史編集委員会
- 13 大津市歴史博物館1995『特別陳列 縄文時代の天津』
- 14 大津市埋蔵文化財センター1999『展示解説 大津の縄文時代』
- 15 佐藤宗諱ほか1975『穴太下大門遺跡』(大津市文化財調査報告書(3)) 市教委
- 16 松浦俊和1976『真野・神田遺跡』(大津市文化財調査報告書(5)) 市教委
- 17 松浦俊和1976『大津宮関連遺跡(皇子が丘地域)』(大津市文化財調査報告書(6)) 市教委
- 18 松浦俊和1982『真野・神田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(大津市埋蔵文化財調査報告書(3)) 市教委
- 19 吉水真彦1982『滋賀里・穴太地区遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』(大津市埋蔵文化財調査報告書(5)) 市教委
- 20 須崎雪博1983『錦織遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(大津市埋蔵文化財調査報告書(7)) 市教委
- 21 吉水真彦ほか1987『埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書Ⅱ』(大津市埋蔵文化財調査報告書(12)) 市教委
- 22 栗本政志1988『錦織遺跡発掘調査報告Ⅲ 南滋賀遺跡発掘調査報告Ⅰ』(大津市埋蔵文化財調査報告書(13)) 市教委
- 23 青山 均ほか1989『穴太遺跡(弥生町地区)発掘調査報告書一一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う一』(大津市埋蔵文化財調査報告書(15)) 市教委
- 24 田中久雄1992『太鼓塚遺跡発掘調査報告書一一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う一』(大津市埋蔵文化財調査報告書(19)) 市教委
- 25 青山 均・福田 敬1992『上高砂遺跡発掘調査報告書一一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う一』(大津市埋蔵文化財調査報告書(20)) 市教委
- 26 田中久雄ほか1992『北山田遺跡発掘調査報告書一一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う一』(大津市埋蔵文化財調査報告書(21)) 市教委
- 27 松浦俊和ほか1992『埋蔵文化財包蔵地調査報告書Ⅲ』(大津市埋蔵文化財調査報告書(22)) 市教委
- 28 福田 敬1994『大谷南遺跡発掘調査報告書一一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う一』(大津市埋蔵文化財調査報告書(24)) 市教委
- 29 青山 均ほか1994『大谷遺跡発掘調査報告書一一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う一』(大津市埋蔵文化財調査報告書(25)) 市教委
- 30 福田 敬ほか2000『史跡衣川廃寺跡整備事業報告書』(大津市埋蔵文化財調査報告書(30)) 市教委
- 31 田中久雄ほか2000『雄琴遺跡群発掘調査報告書一雄琴駅周辺土地区画整理事業に伴う一』(大津市埋蔵文化財調査報告書(31)) 市教委
- 32 横山浩一ほか1960『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部 京都大学文学部
- 33 西田 弘1960「大津京趾附近の先史遺跡出土品解説」『大津京趾一その関係遺跡と出土品一』近江古美術大観刊行会編 近江神宮刊

#### 編集後記

今回は8編を数える多数の論文を掲載することができました。内容も、縄文時代から近世までと各時代の研究論文のほか、普及事業についての報告もあり、バラエティに富んだものとなりました。

埋蔵文化財を取り巻く環境は年々厳しくなっていますが、我々の調査・研究の成果をわかりやすくお届けできるよう、今後も様々な形で努力していきたいと思えます。

(T. K)

平成13年(2001年)3月

#### 紀要第14号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社  
大津市札の辻4-20  
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668